

津和野町埋蔵文化財報告書

# 高田遺跡Ⅲ

平成4年度高田遺跡発掘調査概報

1993

津和野町教育委員会

「高田遺跡Ⅲ」平成4年度高田遺跡発掘調査概報正誤表

下記のとおり誤りがございますので、お手数ですが訂正をお願いいたします。

ページ	箇 所	誤	正
9	10	明治	<u>明代</u>



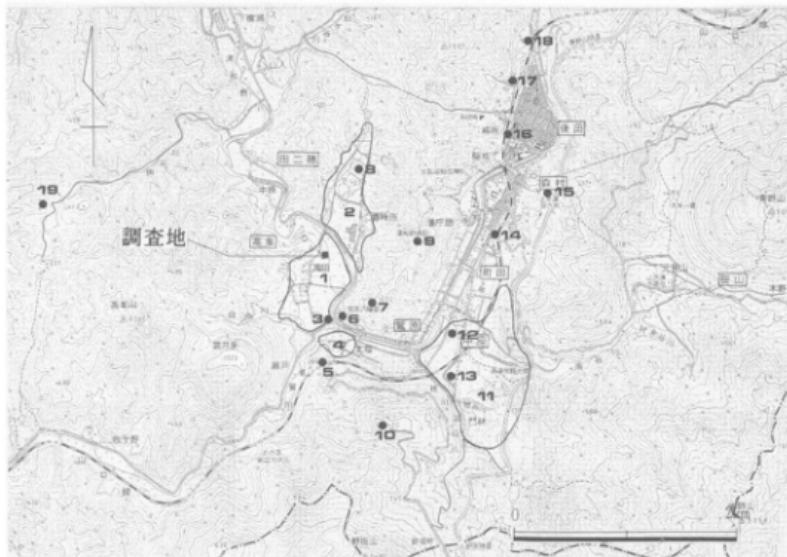
## 例　　言

1. 本書は、島根県鹿足郡津和野町大字高峯通称高田地区内に所在する高田遺跡において、平成4年度に津和野町教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査にあたっては、下記の方々にご指導いただいた。

山口大学人文学部助教授	中村友博氏
広島県立美術館学芸員	村上勇氏
島根県教育委員会文化課	熱田貴保氏
津和野町文化財保護審議会会长	鈴川兼光氏
3. 本書に用いた方位は、第1図及び第2図においては真北を示し、その他の図においては磁北を示す。
4. 本書中の実測図に記載されたグリッド名及び発掘区（T～V区）の名称は、平成3年度の調査時に設定した方眼及び発掘区（L～S区）を継承したものである。
5. 調査によって作成された記録類及び出土遺物は、津和野町教育委員会に保管されている。

## はじめに

津和野町では、昭和52年度以来町内各所では場整備事業が実施されてきました。津和野町教育委員会では、は場整備事業の計画策定後、事業主体者である津和野町土地改良区と、事業計画地内に所在する埋蔵文化財の取扱について協議を重ねてきました。高田遺跡においては、昭和63年度以降継続的に分布調査を実施し、埋蔵文化財保護のための詳細な資料を蓄積してきましたが、は場整備事業の性格を勘案した上で、一部記録保存のための発掘調査を実施することとなりました。平成2、3年度の調査では、縄



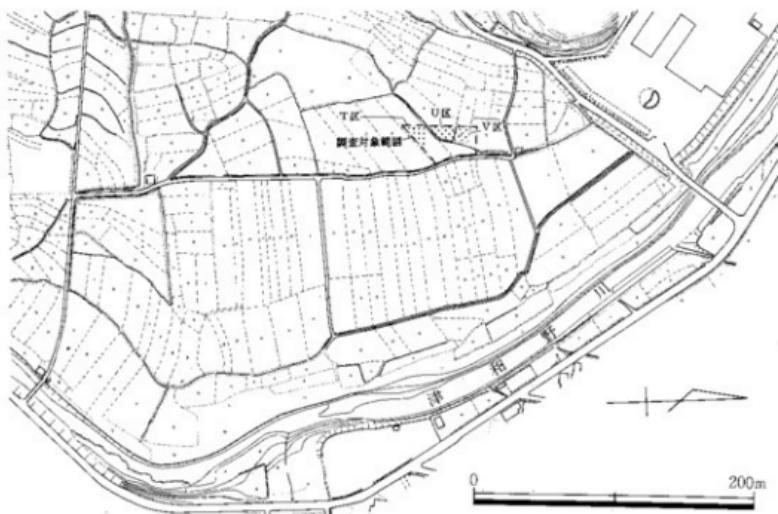
第1図 高田遺跡周辺遺跡分布図

- 1. 高田遺跡
- 2. 喜時雨遺跡
- 3. 宝篋印塔（伝吉見民部墓）
- 4. 大蔭遺跡
- 5. 茶臼山城跡
- 6. 驚原八幡宮
- 7. 中荒城跡
- 8. 要害山砦跡
- 9. 津和野城跡
- 10. 陶晴賢本陣跡
- 11. 中座遺跡群
- 12. 西中組遺跡
- 13. 山崎遺跡
- 14. 森遺跡
- 15. 丸山遺跡
- 16. 山根遺跡
- 17. 宝篋印塔（伝吉見正頼夫人墓）
- 18. 宝篋印塔（伝吉見頼行墓）
- 19. 田平の宝篋印塔（至徳三年銘）

文時代早期から近世にいたる複合遺跡の存在が確認されました。今年度の調査地は、平成3年度の調査地から北東に約450mの地点で、従来、鴻寄遺跡と呼称されてきた遺物散布地にあたります（第2図）。

高田遺跡は、島根県鹿足郡津和野町大字高峯通称高田地区に所在します。津和野川とその支流名賀川によってはさまれた扇状地上に立地し、標高523mの雲井峠の山麓にあたります。遺跡の周辺には、縄文時代後期後半の土器や石器が多く量に採集されている大蔭遺跡（第1図4）が隣接するほかは、中世の遺跡が顕著にみられ、津和野城（第1図9）を中心とする諸支城、砦が取り巻き、高田遺跡の北側には、中世津和野の領主吉見氏の本拠地であったと推定されている喜時雨遺跡（第1図2）が存在します。

これまでの高田遺跡の発掘調査では、縄文時代早期、後期の土壙墓、弥生時代後期の土器棺墓や竪穴住居、平安時代の掘建柱建物、中世の掘建柱建物、地鎮祭跡、木棺墓が確認されています。中世の遺構、遺物が遺跡の主体をなしており、ここに吉見氏時代の武士団集落が存在したことが推定され、吉見氏の本拠地の一画をなしていた可能性が考えられます。



第2図 平成4年度高田遺跡調査区位置図

## 調査の経過

今年度の調査は、8月から始まりました。調査地は、津和野川の氾濫原と高峯山塊からせりだす山麓の接する地点（第1図）でした。調査区画は、平成3年度の調査で使用したものを使い、南北方向に則した10m×10mの方眼を調査地全域に設定しました。発掘区は、平成3年度の調査の際の発掘区（L区～S区）を継続しT区～V区と呼称しました（第2、8図）。

掘り下げは、まず重機により耕作土を全面的にぎ取り、基盤土以下は手掘りによって行ないました。基盤土下は遺物の出土地点を平板実測しながら掘り下げました。遺構は、地山面上で検出し、隨時写真撮影、実測を行ない、記録をとりました。取り上げた遺物については、水洗、注記のち接合、復元を行ないました。

調査は、平成4年3月まで実施しました。



掘り下げ作業



遺構検出作業



平板実測作業

## 各区の概要



T区・遺物出土状況（東から）



T区・遺物出土状況（第7図1）



T区・遺物出土状況（吹子の羽口）

### T区

T区は、氾濫原にあたる発掘区で、遺構は検出されず、流れ込みと思われる厚い遺物包含層の堆積が確認されました。多量の出土遺物は、今回調査したU区で確認されたとおり、より高い位置に広がる一帯に、氾濫原を避けるように跡地が形成されたことを示唆するものといえます。

堆積層は、大きく2つにまとめられ、中、近世の遺物を混入する平安時代の須恵器を主体とする層の下層に、弥生時代後期の土器を主体とする層が漸移的に続いていました。

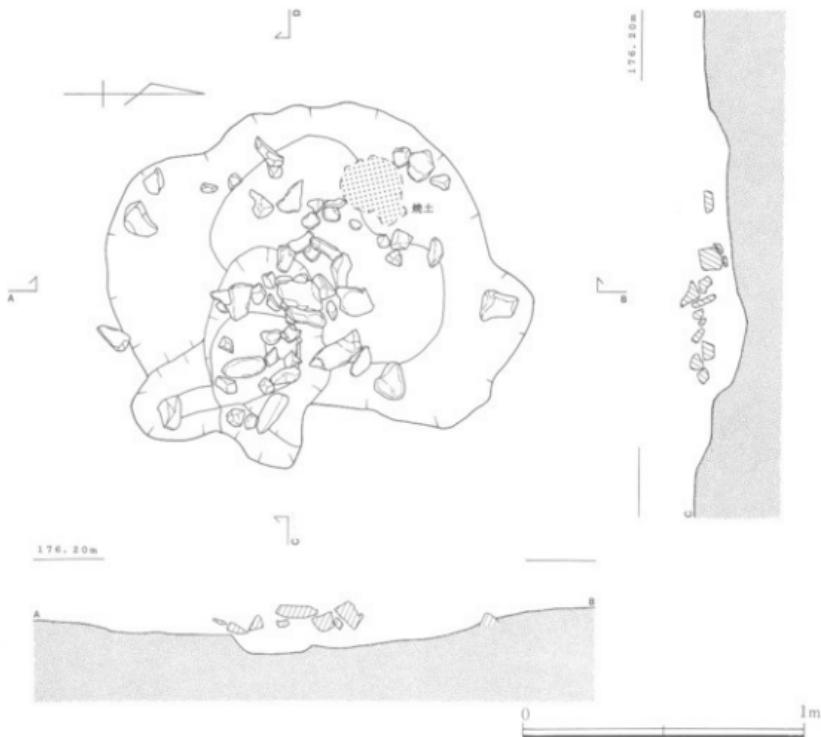
遺物は、若干の弥生時代前期の土器片、弥生時代後期の土器、平安時代の須恵器、土師器、中世の土師器、青磁、白磁等の輸入陶磁器などの土器類のほか、鉄製品、鉄滓、吹子の羽口といった鍛冶に係わる遺物も多量に出土しました。

### U区（第4図）

U区は、現状でT区と比較して約1m高く、遺跡地本体の先端部分にあたる地点と考えられます。柱穴と土坑2基（SK-26、27）が検出されましたが、出土遺物から、U区の遺構は概ね中世ごろのものと考えられます。



U区・SK-26（土坑・北から・第3図）



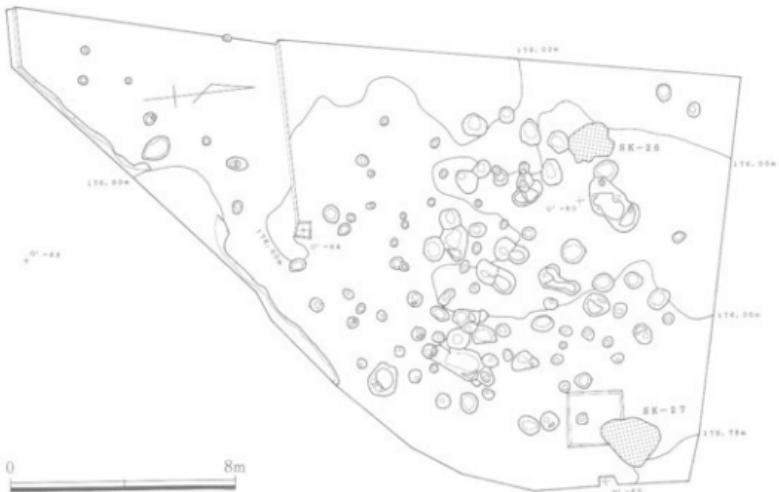
第3図 U区・SK-26実測図

SK-26（第3図）は、不整な椭円形を呈し、南北1.50m、東西1.04m深さ0.18mを測る土坑です。礫が埋土中に含まれており、その配列に規則性は認められませんが、ほぼ同じ高さに揃っています。土坑の北西部分には焼土の範囲が検出されました。埋土中から鍋（第7図5）と足鍋の脚が出土し、中世以降の時期の土坑と考えられますが、その性格は不明です。

SK-27（第5図）は、南北2.00m、東西1.32m、深さ1.13mを測る不整形な土坑です。埋土中に人頭大から拳大の礫を多数含んでおり、人為的な割れ口をもつものも認められました。投棄されたものと思われます。埋土中から混入と思われる弥生土器片が数点出土したほかは、土坑の時期を判断する遺物はなく、その性格も不明です。



U区全景（北から）



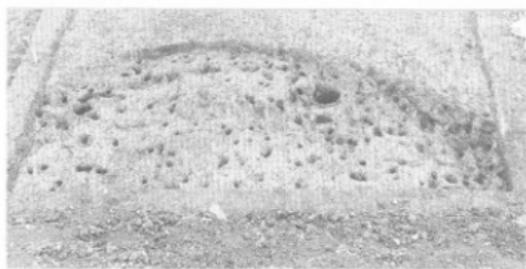
第4図 U区遺構配置図



第5図 U区・SK-27実測図

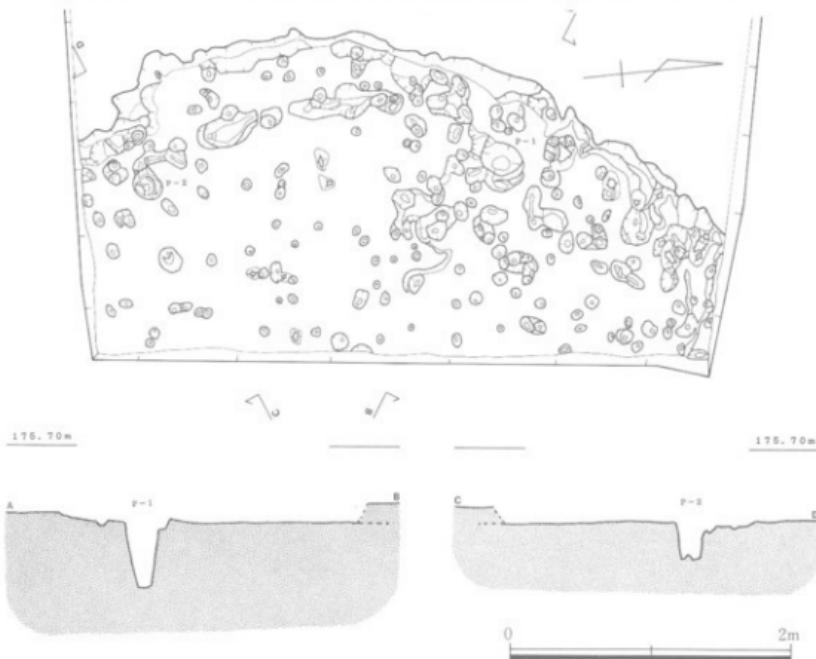
## V区

堅穴住居（S I - 2）1棟を検出したほかは、遺構は検出されませんでした。S I - 2（第6図）は、復元径3.37mの円形の堅穴住居で、P - 1とP - 2が柱穴になるものと思



V区・S I - 2（堅穴住居・東から・第6図）

われ、本来6本柱の構造をもつものと推定されます。床面には多数の小孔が穿たれており、その性格は不明です。弥生時代の住居と思われます。



第6図 V区・S I - 2 実測図

## 出土した遺物(第7図)

今回の調査では、T区からの遺物の出土が多く、弥生時代前期に始まり、弥生時代後期、平安時代、中世、近世の遺物が検出されました。特に平安時代の須恵器が顕著に出土しました。

第7図の1は、宋代越州窯系の青磁釉四耳壺で、13世紀頃に比定されます。

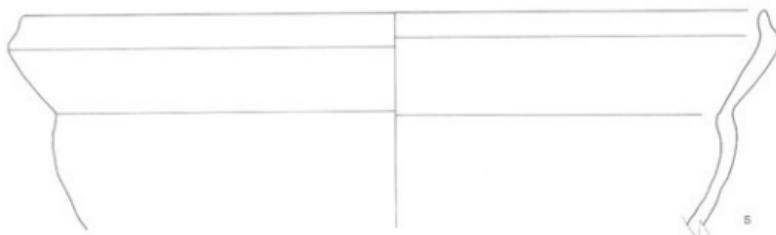
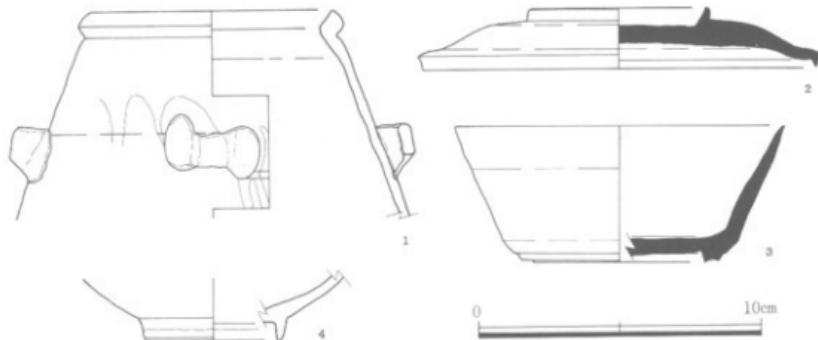
2は須恵器の坏蓋、3は須恵器の坏で、

いずれも平安時代前半頃のものと思われます。4は、明治の翡翠釉のかかる椀で、外面はあざやかなコバルトブルーに、内面は薄緑色がかってくすんだ水色に発色し、底部に黄釉を施しています。16世紀代に比定されます。

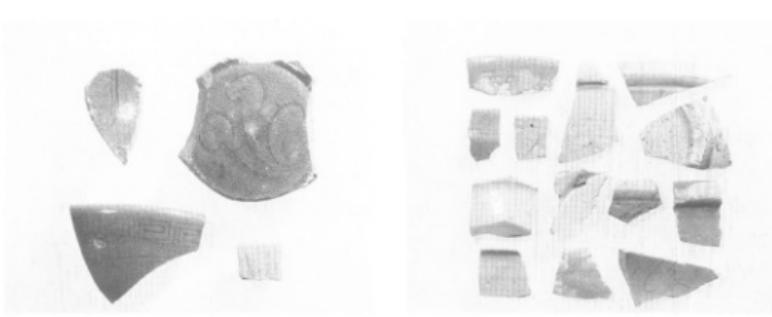
5は、SK-26から出土した土師質の鍋です。室町時代頃のものです。



明・翡翠釉椀(第7図4)



第7図 出出土器実測図

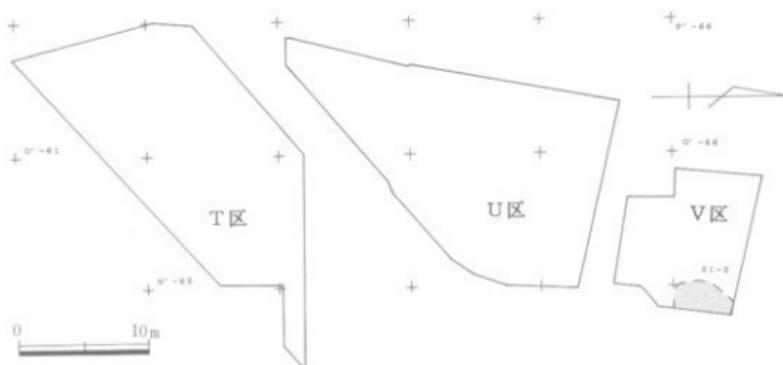


青 磁

白 磁

## 検出した遺構

遺構名	規 模・m	性 格	時 期
S K - 26	1.50×1.04	不明土坑	中世
S K - 27	2.00×1.32	不明土坑	不明
S I - 2	復元径3.37	竪穴住居	弥生時代?



第8図 平成4年度高田遺跡調査区概念図



